

## 13 ビルマの便所あれこれ

高橋昭雄

ビルマ（現ミャンマー）<sup>①</sup>は、北緯約一〇度から二八度、東経約九二度から一〇三度に位置し、面積は約六八万平方キロメートルで日本の約一・八倍、南北約二〇〇〇キロメートル、東西の幅は最大で約九二〇キロメートルである。このような南北に長い国土と、ベンガル湾からの熱帯モンスーンを遮って南北に走る険しい山脈のために、気候の地域格差が非常に大きい。特に、年間降水量は、地方によって大きく異なる。どの地方の気候も、六月から十月までの雨季と十一月から五月までの乾季に峻別されるが、アラカン海岸やテナセリム海岸では年間降水量が五〇〇〇ミリ前後となり、エーヤワディ（イラワジ）川のデルタ地帯も二五〇〇〜二八〇〇ミリの多雨地帯であるのに対し、エーヤワディ川中流域マングラレー付近の年間降水量は、八〇〇ミリに満たない。こうした気象条件に適應して、ビルマの伝統的便所の形態も、地方によってかなりの相違がみられる。以下、マウン・ティツという随筆家の方法<sup>②</sup>にしたがって、ビルマの便所の形態を分類し、私の経験を加えて、デルタ地域を中心とする下ビルマとマングラレー周辺の上ビルマの伝統的便所を対比しつつ、またそれらと都市部の比較的近代的な便所とを対照させながら、ビルマの便所を紹介していこう。

## ● 便所の諸型

## ① トーティン便所

トーティンとは林の中に座るといふ意味で、まさに繁みの中で用を足すことを言う。マウン・ティツによると、農村部ではまだかなりこの方式が残っているというが、私は見たことがない。これを「便所」であるといえる理由は、する場所が決まっているからである。毎朝一回、男と女の場所を分けて、皆で歓談しながら用を足す。便は豚に食わせたり、そのまま肥料にするという。私は、乗合バスで長距離旅行をした際に、繁みのそばでバスが停車して、乗客達が用便をしにバラバラとバスを降りていくのを何度も目撃したことがある。ビルマ人は、ズボンにはかず、ロンジー<sup>③</sup>と呼ばれる筒状の布を腰に巻いており、その下端は足首に達する。男と中年以上の女（田舎では若い女も）はパンツをはいていないので、腰の結びを解いて、布の筒を上を持ち上げながら筒の中に座れば、布で囲まれた簡易便所ができてしまう。若い女はそういうわけにもいかず、大きな町の休息所の便所には若い女だけの長い行列ができる。

## ② ボウン便所

「ボウン」とは、「一般」あるいは「共通」という意味である。トーティン便所の発展型であろうか、便所は男の部屋と女の部屋に分かれており、一部屋に六人前後入れるという。部屋の中には定員分だけ穴があいており、その上に板が二枚渡してあって、真ん中が空いている。穴と穴の間には横棒があるだけで、板や布などの仕切りはないので、隣を見れば用を足している人を見ることができ、そうはしないのがエチケットだという。マウン・ティツは、日本の銭湯を「ボウン風呂」と呼ぶ

であり、風呂と便所の違いはあるが同じようなものである、と述べている。だが、いくら日本人が銭湯になれ親しんでいるとは言え、この便所を使うのはかなり勇気がいるものと思われる。一般にこの方式の便所は川の縁に立てられていて、便は川に流れて行くようにできている。

#### ③ テレビ便所

雨量の少ない地方、すなわち上ビルマで多く見られるが、他地方の貧困地域でも利用されている。この便所には屋根がなく、しゃがんでも首から上は外から見えてしまう。便所の壁の材質は、ジュート袋かワービヤーと呼ばれる竹を編んだ筵状じょうじょうのものである。しかし、人が立つ床板の上の部分しか隠されておらず、下の部分には何の遮蔽物もない。便器（と言っても床の middle に穴があいていて、前の部分に簡単な木製の金隠しが付いているにすぎない）の直下の土には浅い穴が掘られていることもある（写真1。ただし、屋根付き。便器はより原始的で二本の棒が渡してあるのみ）。床下には豚や犬が入り込んで排泄物を食べる。私もこの便所を利用したことがあるが、頭の上には青い空が広がり、便器の下からは涼しい風が吹き込んで、なかなか快適であった。だが、尻の下で鶏が鳴いており、少し騒々しかった。

#### ④ 河川便所

この方式の便所はマウン・ティツの随筆では紹介されていないので、私が書き加えることにした。デルタ地帯の小河川を船で走ると、若干勾配の急な河岸から川に向かって水平に棧橋のようにつぎでた板の上に、前述のテレビ便所もしくはそれに簡単な屋根を載せた便所をしばしば見かける。排泄物は直接川に落下し、豚や犬ではなく魚の餌になるようである。このような便所のすぐ下流には水浴びや洗濯をしている者が必ずいるが、彼らは排泄物が流れてこない距離を経験的に知っているのだらう



写真1 屋根付きのテレビ便所



写真2 簡易水洗便所

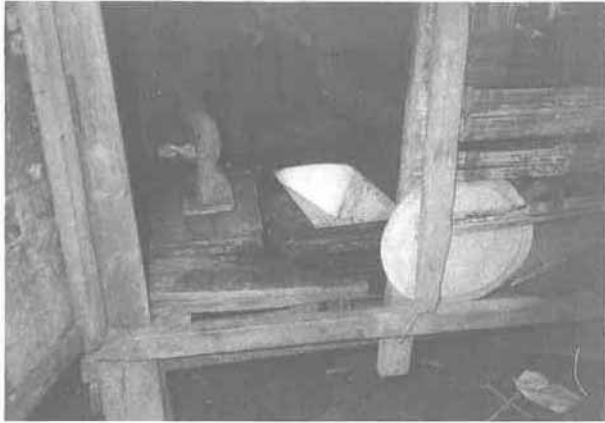


写真3 改良型の簡易水洗便所

か。

## ⑤ トゥイン便所

トゥインとは穴のことで、この型の便所は上ビルマの乾燥地帯で専ら用いられている。穴を深く掘って、その上に板か竹を板状に紐で結んだものを渡し、周りを竹で編んだワービャーで囲んだだけの便所である。私の聞いたところによると、この方式の便所を使う人は、尻の掃除をする際に紙や水は用いず、ドオウツと呼ばれる小さな竹べらを使用するのが一般的である。この竹べらで肛門に付着している残存物をかきとり、竹べらごと穴の中に捨てるのである。私もこの型の便所に入ったことがあるが、その中で、ワービャーのところどころ、しゃがんで手の届く範囲に穴があいていることに気づいた。用便中の徒然に、使った人々が落書きをするような気持ちで竹を折ったのかと思ったが、そうではなかった。後で人に聞いてみると、何も持たずにこの便所に入った人がワービャーを折って、ドオウツの代わりに使うのだと言われた。穴が満タンに近くなると、その穴を土で埋めて、別の場所に穴を掘り、囲いを移動して新しい便所ができあがる。私が上ビルマのチャウセー地方で農村調査をしたときに宿泊させてもらった家では、わざわざ労働者（日雇いで働く農業労働者）を雇って、まだ満タンにはほど遠い穴を埋めさせ、私のために新しい便所を作ってくれた。

## ⑥ ザラー便所

ザラーとは枡のことであり、便器の下に板かトタンで作った大きな枡を置き、そこに便を溜めるので、このように呼ばれている。イギリスの植民地時代には、このザラーを掃除するのはインド人の仕事であったという。当時は真夜中に毎日集便に来たというが、現在のヤンゴンでは週に一回、夜の七

（八時頃に集めに来ることになっている。しかし、私がヤンゴンに滞在していたとき（一九八六～八八年）には、ビルマ式社会主義政権の公務員がこの仕事をしていたため、御多分に洩れず怠慢で、集便に来るのは月に一回あるかないかという状態であった。したがって、このタイプの便所は非常に汚かった。ただし、マウン・ティックによると、この便所は自分の出したものをじっくりと観察できるので、健康によいとのことである。

#### ⑦ 水流便所

二四時間水が流れ続けている便所。管井戸のある家にしか設置できないので、ビルマには非常に少ないという。さらに、新聞紙のような粗い紙やドオウツは使用できない。便所が詰まってしまいうからである。したがって、トイレットペーパーを使用するか、水を使つて手で洗うか、というこのになる。ちなみに、私がビルマに滞在していたときのトイレットペーパーの価格は、一ロール当たり外国製が二〇～二五チャット、ビルマ製が八～一二チャットで、ビルマ製のもの品質は新聞紙とほとんど変わらない。当時の平均的公務員の月給が、四〇〇～五〇〇チャットであったから、水流便所用のトイレットペーパーは、とても普通の人の買える価格ではない。

#### ⑧ 水洗便所

この型の便所は三種類に分けることができる。第一は初めから水洗便所として作られたもの、第二は⑦の水流便所だったものが水を四六時中得ることができなくなって、水洗便所に変わったものである。両者とも洋式またはトルコ式の、陶磁器製の便器を備えている。これらを使用するときも、水流便所と同様に良質のトイレットペーパーか水を使わなければならない。水洗便所の第三のタイプは、

③のテレビ便所に屋根が付いて、木製の便器の直下に樋が置かれ、その樋には傾斜が付けられていて、樋のもう一方の端は便所の外に掘られた穴につながっている、という形状をしている（写真②）。用便後にバケツで持ってきた水を流すと、便と水が穴に落ちて行くように作られている。マウン・ティツも言っているように、乾季になって流す水が少なくなると、樋に途中に汚物がたまって非常に臭い。ただし、前二者ほど使用する紙に制約はなく、ドオウツも使うことができる。また前二者は、庭のどこかにコンクリートで便を溜める設備を作り、満タンになったらバキュームカーを呼ばなければならぬが、第三の型の水洗便所の場合、⑤のトゥイン便所のように、満タンになったら穴を埋めて、近くに穴を掘って、そこに樋の先を伸ばせばよい。

ここまでは便所の型について述べてきたが、次にそれらが設置されている場所について、三つに分類し、そのビルマ的特徴を見ていこう。

#### ●所有権からみた便所

まず第一は私有便所。そもそも上記の分類はこの便所をもとにして行なってきたのであり、①～⑧のあらゆる型がこの便所には見られる。

第二は市場便所。マウン・ティツはこのように呼んでいるが、市場だけでなく、駅や公園にある便所も含むので、公衆便所と呼ぶのが適当であろう。この範疇の便所には、無料のものと有料のものがある。無料のものの場合、掃除する人がいないのか、便が満タンになると便器から溢れ出し、その後の利用者は、入口近くの便器の周囲の床にところかまわず用便をする。私は、ヤンゴンの北方約百

キロメートルのところにあるオッポという町に旅行した際、どうしても我慢できずにこの種の便所に入ろうとしたが、その筆舌に尽くし難い汚さを見て、急に便意が萎えてしまった記憶がある。このような「無法状態」を克服するため、ヤンゴンの市場では有料の便所が増えてきた。便所の管理費を利用者から徴収するのである。入口の横に番人の小屋があり、利用者は番人に一五ビャー（一〇〇ビャー＝一チャット）ほど手渡すことになっている。番人はタバコ売りも兼ねているが、便所掃除は彼らの仕事ではなく、市場の管理者が別に人を雇う。

第三は役所の便所。マウン・ティツによると、形状や清潔さなどは、有料の市場便所（公衆便所）と大差がないが、上級役人のための鍵つき特別便所があるという。しかし私の経験によると、両者は大きな違いがある。それは、公衆便所には紙がなく、役所の便所にはそれがふんだんにあるということである。これは日本の場合も同じであるが、ビルマの場合には特に重要な意味を持つ。ビルマは、一九八八年までは社会主義政策をとっており、あらゆる物資の供給において官が民に優先した。特に、一九八〇年代は物資が不足して、紙ばかりでなくインクや鉛筆なども役所にはあるが、民間では不足しているという状態であった。そして市場では役人が横流したものが法外な値段で売られていた。

以上、マウン・ティツの分類を参考にして、ビルマの便所の型を八種類に分け、さらに設置されている場所を三種類に分けて、その特徴を説明してきた。ただし、これらはあくまでもビルマ連邦の主に中央部に居住するビルマ人の便所について述べたものであり、周辺の山岳部に住むシャン人やカレン人のような少数民族についてはこの限りではない。これらの地域の便所がビルマ人のそれとどのよう異なるのか興味のあるところではあるが、現時点では私の手に負えないので今後の課題としたい。



また、上記①～⑥、および⑧の一部で述べたようなビルマ人たちの伝統的便所も、徐々にではあるが、その形を変えつつある。その一例として、政府の衛生指導による「水洗便所計画」が挙げられる。現在、衛生指導によって誕生しつつある便所の型は、⑧の第三型の改良型とも言うべきものである。すなわち、この型の便所の便器をプラスチック製のものにし、樋をプラスチックのパイプに変えたものがそれである（写真③）。これによってどれだけ衛生度が増すかはよくわからないが、こうした伝統技術に連続した改良は、民衆にとっても受容し易いようであった。これからビルマは開国して諸外国からの援助を積極的に受け入れることになるであろうが、ビッグ・プロジェクト中心にならず、民衆に受け入れ易い、このように伝統に連続した形での技術改良を行なってほしいものである。

## 〔注記〕

(1) ビルマは一九八九年六月に国名をミャンマーに変更したが、私がビルマに滞在していた年はビルマであったこと、「上ビルマ」「下ビルマ」を「上ミャンマー」「下ミャンマー」に変更してよいか疑問であること、「ビルマ」はビルマ族を指す言葉であり、「ミャンマー」は少数民族を含めたミャンマー連邦の民族すべてを指すという軍事政権の説明は説得力に乏しいこと、日本人にとっては「ビルマ」が使い慣れた呼称であり、日本以外の諸外国のマスコミは依然として「Burma」を使っていること等を考慮して、本稿では「ビルマ」を使用する。

(2) Maung Thi, "kyano nâlehâlou pyôhsoubamji-êndha dîga-「私の知っていることを言いましたー便所注釈」", *mayajêi magazin*, 一九八八年一〜三号。

(3) 男物はハンマー、女物はタメインと言い、両者を総称してロンジーと言う。

(4) 私の見聞によると、水で手を濡らして拭く場合、左手で行なうのが普通である。左手は宗教上の理由で不浄であるからと言われているが、右手は飯を食べるのにとっておくためにこのようにするのであろう、と私は考えている。